

# 「主体的・対話的で深い学びの推進」

## 一 生徒の自己肯定感を育む授業づくり・学校づくりを目指して 一

主 幹・指導主事	大久保雅司
主 幹・指導主事	橘田 浩
主 幹・指導主事	神宮寺 聡
副主幹・指導主事	小宮山 隆
主 幹・指導主事	相川 恵子

キーワード 主体的・対話的な授業づくり・学校づくり 自己肯定感

### I 主題設定の理由

#### 1 研究主題の設定について

昨年度に引き続き、同一の主題で研究を行うこととした。今年度は、昨年度の課題を踏まえ、生徒の自己肯定感を育むには学校の教育活動全体での取組が必要であると考え、副主題の中に「学校づくり」の視点を盛り込むこととした。

#### 2 1年目の取組と成果と課題

研究協力校の担当者との協議を重ねながら、以下のような実践を行った。

##### (1) 研究・教科担当への聞き取り

生徒に関して聞き取った内容としては、以下のような内容が挙げられた。

- 中学校では集団のフォロワーだった生徒も多い。
- 高校進学後、リーダーになる場面があり戸惑う生徒もいる。
- 周りに関心や興味がない、互いにコミュニケーションが取れない生徒もいる。

##### (2) 生徒アンケートの実施

生徒の実態把握のため、「学校・学習生活・身に付けたい力に関するアンケート」を1年生(150名)を対象に行った。結果による生徒像を以下のようにまとめた。

- ア 学習に意欲的な生徒も多いが、方法が分からず悩んでいる。
- イ これから授業や資格取得・検定に頑張りたい。
- ウ 将来のために身に付けたい力もあるが探究的な力も身に付けたい。
- エ これまで自信につながる体験もしてきたが、まだ確たる自信が持てていない。

##### (3) 校内研修

8月末に「授業改善」をテーマとして、研究協力校において研修会を行った。研修会後のアンケートからの自由記述による代表的な感想・意見は

以下のようなものであった。

- 生徒の授業への意欲が高いことが分かった。
- 生徒が自信をもてるよう授業を改善していきたい。
- 授業改善をしたいが忙しくてできない。
- 学習を楽しくするのも教員の方だと感じた。
- 基礎学力について、教科に関係なく徹底的に考え工夫しなければならない。
- 他教科の取組を知ることができ、とても参考になった。
- 生徒が考える授業を増やしたい。

これらから教員も生徒をどのように指導してよいか迷っている様子が伺えた。また、授業改善や評価方法で実践を重ねている教員もいるので、定期的な教科会議・相互授業参観等を充実させながら、センターからは継続的に、情報提供や授業づくり・学校づくりへの支援を行うこととした。

#### (4) 教科の取組

##### ア 国語科

「主体的・対話的で深い学び」の視点による授業改善を目指し、国語総合の古典分野での授業について授業支援・検証授業を行った。

自己肯定感を高めることとの関連において、話し合いや発表などの言語活動で「学び合う場」を設定した。班の話し合いや発表にはホワイトボードが有効利用され、生徒への事後アンケートにも、「みんなのいろいろな意見が聞けたので楽しかった」「一人で考えるよりも班で話し合うことで、話の内容がわかりやすかった」といった感想が、多く寄せられた。自分の考えが授業の展開に取り入れられた経験や、自分の思いがクラスの仲間を受け入れられた体験を通して、学びに向かう力は一層養われる。国語の授業において、言語活動の手段・手法を正しく教え、それを学校全体で共有することが望まれる。

## イ 数学科

「自作プリント」の活用、「ペア学習」の実施、「自己評価・目標シート」の活用等重点をおいた実践を行ってきた。成果としては、生徒のアンケートを通して、生徒の実態や考え方を把握することができ、教員側が固定的にイメージしている生徒像を覆すことができた。これにより、「生徒の授業に対する意欲を引き出す」ための授業改善はどうあるべきかを考える良いきっかけとなった。

両教科とも「生徒自身の自己評価」と「教員による評価」の結びつきが課題として挙げられる。評価と「主体的・対話的で深い学び」の関連については、継続的な研究が望まれる。

### (5) まとめ

これまで教員側は生徒の学習意欲をあまり感じていなかったようだが、生徒アンケートや研修会を通して、少しずつ学びの在り方を変えていかなければならないと認識できたことが成果として挙げられる。

## II 研究の目的・方法

### 1 研究の目的

「主体的・対話的で深い学び」に向けた授業における活動、及び、自己の目標設定とその振り返りを行う活動から、生徒は自己の活動を肯定的に捉えるようになってきた。また、教員は教科間の情報共有を図ることで学校全体での校内研修の意義を実感することができる。これらのことを考察するために、研究協力校に対して、授業づくり・学校づくりについて継続的に支援を行う。

### 2 研究の方法

#### (1) 授業改善への継続的支援

授業改善について、これまでの取組や昨年度の課題も考えながら、継続的に支援を行う。生徒の実態等を踏まえながら、授業改善の具体的な方法について相談しながら改善を行い、授業づくりの在り方とそのよさについて考察する。

#### (2) レベルアップシートの活用に対する支援

各学期に1回ずつ自己の目標を設定し、その振り返りを行う「レベルアップシート」を導入した。その取組により、生徒の意識の変容を見取り、取組の意義について考察する。

#### (3) 校内研修会の支援

教科の取組や生徒の実態などを校内で共有する

ための研修会について支援を行い、校内研修の活性化を図る。

### (4) 生徒の実態調査

アンケート調査により、生徒に実態を把握し、授業づくり・学校づくりに生かす。

## III 具体的な取組と実践研究

### 1 授業改善への継続的支援

#### (1) 国語科

##### ア 国語科での取組

高等学校の現代文の授業において、言語活動を取り入れた授業の試みは着実に進んできている。しかし、言語活動を行うことが目的となってしまう、単元の目標実現のための手段として有効な言語活動になっているか、といった視点での検証はまだ不十分である。

主体的に学び、思考力・判断力・表現力等を高めるためには、教員が中心となった教材の読み取りの授業ばかりではなく、生徒が主体的に表現することを重視した授業を構想することが必要である。「読むこと」領域の授業においても、読みを深めるためにグループでの話し合いを取り入れることは有効な手段となるだろう。また、授業改善のための評価を行いながら、生徒の自己肯定感を高める授業づくりを行うことを通して、生涯にわたり国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養うことができると考える。

##### イ 授業実践

「主体的・対話的で深い学び」の視点による授業改善を目指し、国語総合の現代文分野について実践を行った。

①対象 2年

②単元名

根拠・理由・主張の三点セットで説明することを通して、文学作品を論理的に読もう。

③教材名 重松清『バスに乗って』

④期間 9月

⑤中心となる言語活動

自分たちで設定した課題について、グループで意見を交換しながら、根拠・理由・主張の三点セットを用いて、論理的に説明・発表し、まとめる(図1)。

##### ウ 成果と課題

「読むこと」領域においても、根拠・理由・主張の三点セットを用いた論理的説明・発表という

言語活動を取り入れることによって、生徒の感想（表1）からもうかがえるように、読みが深まっていることが示された。また、OPPシートの記述（表2）からは、グループでの話し合いや発表を通して、生徒の自己肯定感が高まっていることも分かった。言語活動を行ううえでの手段・手法の工夫（ホワイトボードの利用）や、学習や指導の改善のための評価（OPPシートの活用）など、今後も検証を重ねたい（図2）。

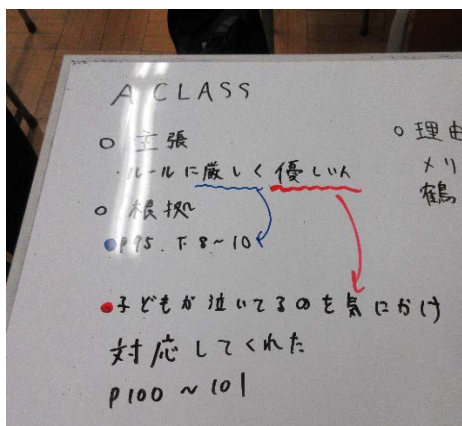


図1 グループでの話し合い

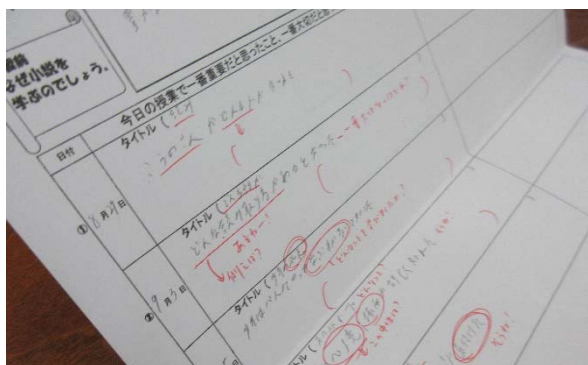


図2 OPPシートの利用

表1 生徒の感想

<ul style="list-style-type: none"> <li>・いろいろな考え方があることを知り、自分では思わなかったことがわかる。</li> <li>・一人一人がどんなふうに内容を理解しているかを聞ける・共有できる。</li> <li>・一人一人の意見がわかるから、まとめやすい。</li> <li>・普段関わらない人とも意見交換できる。</li> <li>・相手が先生ではなくて、同年代の人が思っていることが出るから、本音で話し合えることはいいことだ。</li> <li>・しっかり取り組めるし、集中できる。</li> </ul>
---

表2 OPPシートの記述

<ul style="list-style-type: none"> <li>・理解力が少し上がった。</li> <li>・人がどういう場面で成長するのかを知れた。</li> </ul>
---

- ・大人が、子供の成長のきっかけをくれる人。
- ・国語は人の感情を読むことができる楽しい授業。
- ・今回のテストは今までの中で最高点だったので良かった。ホワイトボードの学習でしっかり取り組めたので良かったです。

## (2) 数学科

### ア 数学科での取組

昨年度の本研究で重点を置いた、

- 生徒が数学的な事象に対して興味関心をもって、自ら進んで学習に臨むことができる授業づくり
- 生徒の学習の課題を踏まえて、生徒個々の状況に応じて学びを引き出し、一人一人の資質・能力を高める授業づくり
- 生徒が主体的に学習を見通し振り返る場面や、考えを深める場面が設定された授業づくり
- 数学の授業を通して「自己肯定感」を高められる授業づくり

について、今年度も継続することとしたが、昨年度の課題や対話を促す視点から、

- 対話内容を明確にしやすい授業づくり

についても加え、継続的に支援を行った。

### イ 授業実践

#### (ア) 問題解決の手順を統一した授業

数学において、問題解決の際にいろいろなアプローチができるなど、その自由度は数学のもつ魅力の一つと言える。対話的な学びにおいて、自己の考えを自由に述べ、他者の考えを聞きながら議論していくことは、深い学びの実現の一つの方法である。しかし、生徒の習熟度や学習段階によっては、様々な考えを出し合いながら深めていくことは難しい場合がある。そのことから、ここでは統一的な手法を示し、一つひとつの手順の意味を考え、対話をしながら、解決方法を確認していく方法を取り入れた。そのような視点で、2次関数のグラフの単元において、グラフをかく手順を統一した実践を行った。（図3）

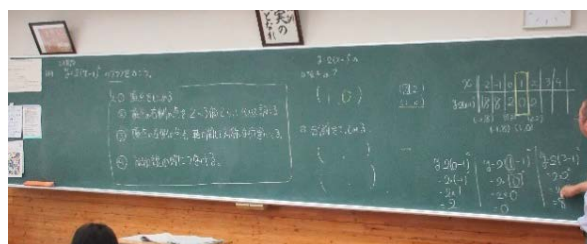


図3 統一的な手法を明記した板書

#### (イ) 具体的な事象に関連させた授業

具体的な事象の問題解決は、数学の活用の視点

において重要である。その一方で、抽象化された数学の理解を深めるために、具体的な事象に落とすことは、その意味をより分かりやすいものにしたたり、他者に説明したりすることに大きな役割を果たす場合がある。そのような視点で、2次不等式を解く部分において、気温の変化を表すグラフを初めに考え、続いて一般の2次不等式の解について考える実践を行った。(補助資料1)

## ウ 成果と課題

昨年度から、「自作プリントを活用したペア学習」を実施してきたが、今年度は特に、「対話の内容をいかに明確なものにするか」、「対話の方法が汎用性のあるものにするにはどのようにしたらよいか」などに重点を置いた。数学科だけのアンケート調査は実施しなかったため、データとしての検証はできないが、授業実践における生徒の活動の見取りから、次のような成果と課題があげられると考えられる。

- 問題解決の手順を統一したことで、生徒が他者に説明する際に、明確な基準をもって説明できた。このことは、研究協力校の当初の課題であった、「自信をもって答えることができない」ことを解決する一歩となると考えられる。
- 抽象的な内容を理解するのに、具体的な事象を用いて説明することにより、「このことはこの例を使うとこのようなことをしていることになる」など、具体的なイメージにより相手が納得しやすい説明ができた。
- 対話的な学びに対して、授業者の評価と学習者自身の自己評価をどのように有機的に結びつけるか、それらの評価をもとにした授業改善のPDCAのサイクルをどのように確立していくかが課題となった。



図4 生徒同士の学び合いの様子

2年間の研究を通して、生徒の実態を把握・理解し、生徒に身に付けさせたい力をどのように設定し、どのような指導方法・支援方法が効果的であるかを教員が協同して研究することが大切であ

ると改めて感じた。山梨県総合教育センターの支援体制においても、カリキュラム・マネジメントの視点を提案するとともに、教員の考えを十分に踏まえ、相談を重ねながら支援を進めていくことが大切である。

## (3) 家庭科

### ア 授業づくりへの支援

「生活デザイン」の保育・高齢者領域において、生徒が考える場面を多く取り入れた授業づくりへの支援を行った。

#### (ア) OPPシートの導入 (補助資料2)

これまで授業担当者は授業プリントの中で、感想を書かせていた。

- 生徒同士の学び合いだけでなく、生徒たちの授業の振り返りに対して、教員から記述を返していくことで「対話的な学び」につながる。それにより、生徒が認められたと実感できる。
- 学習履歴を明確にし、特に子供や高齢者に関する意識や考えの変容を相互に見取る。
- 「授業タイトル」「本時で一番大切だと思ったこと」を記入することにより、最後に感想をまとめるのではなく、その授業の本質的な問いに対する答えを自分で考えていく。

以上を目的としてOPPシートを取り入れた。

#### (イ) 高齢者に関する探究学習

「健康」「老後資金」「生きがい」等、6テーマ(班)に分かれて、新聞の切り抜き集で調べ、班としての意見をまとめて発表した。調べに要した時間は、1~1.5時間で簡易ホワイトボードにまとめて発表した。



図5 発表の様子

新聞の切り抜き集での調べ学習を行うことにより、各テーマに限定されない高齢者に関する諸問題、高齢者虐待・介護者いじめ等の問題にも気づき、話題にするようになった。普段、高齢者と関わりのない生徒達も、関心が継続するのではないかという効果を感じられた。

#### (ウ) 調理実習(幼児食)

前年まで、統一した材料での幼児食を実習していたが、幼児食は単なる甘いおやつではなく、補食であるということを学習した上で、カップケーキの中身を数種の野菜から選択させた。

実習前に目標を確認していたものの、材料を選択する際に、「自分が食べたいもの、調理しやすい材料」に主眼を置き、幼児食という観点を落としがちであった。振り返りで「栄養を考えた」「子供が食べることを考えて、切り方を工夫した」という記述もあり、各自で考えながら調理していた。



図6 調理実習の様子

## イ OPPシートの評価

12月にOPPシートに関して生徒アンケートを行った。(2年生132人)

### (ア) シートの記入について (図7)

「毎時間記入するのは大変だった」が6割を超え、「少しずつ自分の考えを書けるようになった」も、それに近い数値を示しているので、徐々に手応えを感じ始めているのではないと思われる。

『タイトル』と『一番大切だと思ったこと』に自分の考えで記入できている生徒が8割近くで、調査項目でも最高値であった。「感想」だけであれば、授業の終わりに教員のまとめを聴いて書くことも可能だが、2つの項目は、最初から最後まで学習したことを、自分の言葉でアウトプットしなければならない。生徒自身がこのシートの目的を感得し、学びの本質を理解できつつあるのではないと思われる。

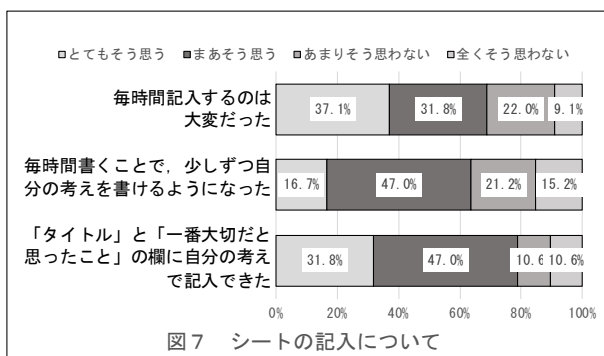


図7 シートの記入について

### (イ) シートでのやり取り (図8)

結果からは肯定的に捉えている生徒が、半数以下となっているが、アンケート実施以降のシートの記述を精査してみると、教員からの問いかけに、次時の欄で答えていたり、生徒から「先生の生きがいは何ですか」等の質問が投げかけられたり、やり取りを行っている。授業者もこれまで、授業中に生徒の考えを取り上げられなかったり、発言

力の大きい生徒に流されたりするという心配があったが、このシートを常用することで、授業では行えない「対話的な学び」につながっているという思いを抱いている。

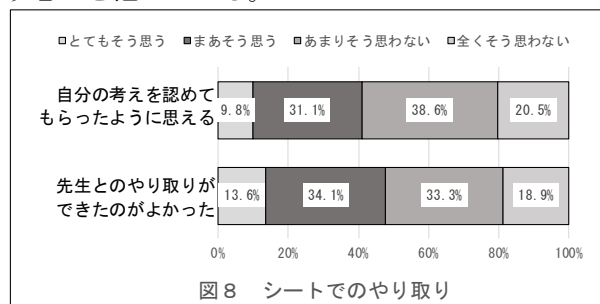


図8 シートでのやり取り

### (ウ) 振り返りについて (図9)

シートの表面で学習前後の「子供」「高齢者」観、裏面で時間毎の記述(今回は2時間毎)を行っている。ある生徒は、学習前は高齢者を「優しい存在である」と記述していたが、学習後は「将来の自分」としており、自分のこととして捉えるようになってきた。1枚シートにまとまっていることにより、約6割が学びを通して、自分の考えの変容や深まりを自覚し始め、肯定的に捉えている。

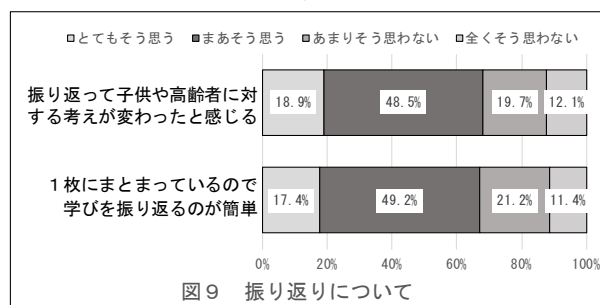


図9 振り返りについて

## ウ まとめ

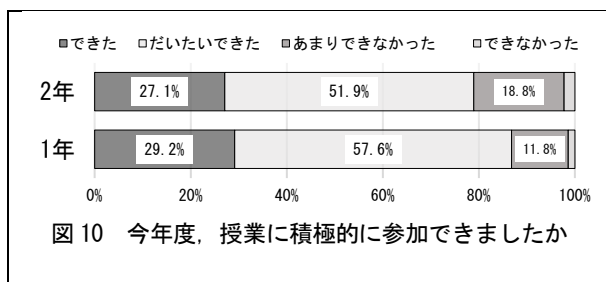
今回は家庭科の中でも「子供」「高齢者」と特に人や生き方に関わる領域について、授業づくりを支援した。生徒自身の過去や未来を投影しやすく、日常的な社会問題にもなっているの、ここで学習したことを将来に渡って生かすことができるのではないかと期待できる。今回、研究協力校の生徒の実態を踏まえ協議を重ねた。授業案を出し合う中で、生徒の考えを表出できるOPPシートも導入・活用してきた。生徒一人一人の考え、さらには「深い学び」を見取れるツールとして、今後もOPPシートの活用を推進していきたい。

### (4) 授業について (補助資料3)

#### ア 授業への積極的参加

「今年度、授業に積極的に参加できましたか」では、「積極的に参加できた」と「だいたいできた」を合わせた割合は、1年生では約9割、2年

生では約8割に達している（図10）。



「授業に積極的に参加できた理由」では、「成績を伸ばしたい」、「進路や将来のため」などの回答が多くみられたが、授業改善の方向性と積極的な授業参加との関係を考察するために、授業に関する回答のみに着目し以下に抜粋する（表3）。

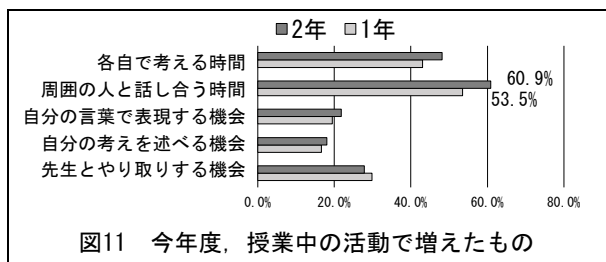
表3 授業に積極的に参加できた理由（自由記述）

- 発言ができたから
- 意見が言えたから
- 生徒に問題を投げかけながら授業してくれたから
- わからないことを質問できたから
- 話し合いの機会があったから
- 話し合いに参加できたから
- グループワークが楽しかったから

授業に関する回答は、主体的な活動(□)と対話的な活動(◇)に大きく分けることができる。このことは、「主体的・対話的で深い学び」の視点による授業改善が、生徒の積極的な授業参加を促す一つの要因となっている可能性を示している。

## イ 授業の変化

「今年度、授業中の活動で増えたもの」では、1・2年生ともに「周囲の人と話し合う時間」が半数以上と最も多く、次に4割以上が「各自で考える時間」と回答している（図11）。

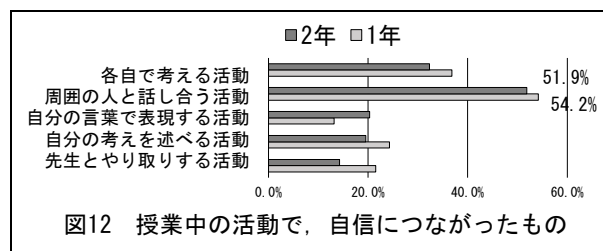


授業が変化してきたと感じている生徒が多数いることを示す結果となった。その授業の変化について、考える時間や話し合う時間が増えたと回答していることから、「主体的・対話的で深い学び」の視点による授業改善が、生徒の実感を伴う形で着実に進んでいると推察できる。

## ウ 授業と自信

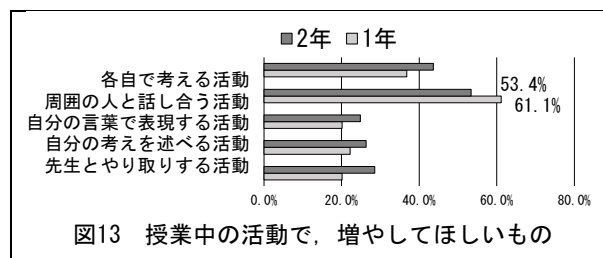
自信につながった活動として、1・2年生ともに「周囲の人と話し合う活動」が最も多く、次に

「各自で考える活動」と回答している（図12）。



## エ 授業への期待

増やしてほしい活動についても、1・2年生ともに「周囲の人と話し合う活動」が最も多く、次に「各自で考える活動」となり、その傾向は自信につながった活動と同じ結果となった（図13）。



## オ 授業についての思い

「授業について、思っていること」では、授業改善の具体的な方向性(○)や授業改善を求める率直な意見(●)に着目し以下に抜粋する（表4）。

表4 授業について、思っていること（自由記述）

- 発言できる機会を増やせばいい
- さらに話し合う機会を増やせばいい
- 意見交換や教え合いのできる形がいい
- 先生だけが話している教科は身につかない
- 聞くだけの授業はあまりしたくない
- 先生だけが話す一方的な授業はわかりづらい
- 先生が一人で話しているが、理解する時間が欲しい
- 授業の改革が必要である

一方的に話を聞くだけの授業ではなく、自ら考え発言したり、話し合いや意見交換をしたりする授業を生徒が望んでいることが推察できる。

## カ まとめ

「主体的・対話的で深い学び」の視点による授業改善は着実に進んでおり、その「授業づくり」の方向性が生徒の積極的な授業参加を促し、さらに、そのような「授業づくり」を多くの生徒が望んでいることがアンケート結果から推察できる。また、授業改善により主体的・対話的な方向に変化してきた「授業づくり」が、多くの生徒の自信につながっていることから、研究主題である「主体的・対話的で深い学びの推進」が、副主題である「生徒の自己肯定感を育む」ための一助にもなっていると考えられる。

## 2 レベルアップシートによる学校づくりの支援

### (1) 目的・方法 (補助資料4)

今年度研究協力校では、学校づくりの一環として、学期ごとに生徒が設定した目標への自己評価を行う、レベルアップシート（以下、シートとする）を導入した。シートはA3両面刷りで、学期ごとに「目標設定」と「振り返り」を記入していく（研究協力校は三学期制）。「目標設定」では、「身につけたい力」を3つまで定め、現状の「自己評価」と目標を実現するために、「どうやってその力を身につけるか」を具体的に記入する。また、「振り返り」では「学期を通しての振り返り」を具体的に記入する。「目標設定」は、生徒個々の自由に任せるが、シート内に（学校が生徒に）「身につけてほしい力」を4点明示し、参考とさせた。具体的には、

- ①【たくましく生きる力】  
（自己管理能力・基礎学力等）、
- ②【学びに向かう力】（発信力・表現力等）、
- ③【他者と共に生きるための力】  
（コミュニケーション能力・協調性等）、
- ④【健康に生きる力】  
（ストレスコントロール力・体力等）

である。

これら4つの力は、研究協力校の学校教育目標と学校指導重点項目からまとめられたものである。これらを参考にして目標を設定した生徒もいるが、自分の言葉で主体的に目標を設定した生徒も多い。いずれの場合も生徒が目標の設定に際し、学校の教育目標や重点項目に向き合う機会ともなっている。

### (2) アンケート結果 (補助資料3)

12月に行った生徒アンケート（対象1・2年生）によると、「(シートで) 目標設定をしたことで、あなたは普段の生活に変化がありましたか」の問いに対して、「目標を意識して生活することができた」および「(授業などに) 積極的に取り組むようになった」と過半数の生徒が回答した。また、「シートに取り組んで、感じていることはありますか」には「目標をもって生活することは大切なことだと感じた」や「前向きに生活できるようになった」などの肯定的な回答が8割を占めた。これらのことから、生徒が学校生活を送るにあたり、シートに取り組むことで、一定の良い影響を与えているものと期待できる。

### (3) 成果

研究協力校によると、シートがコミュニケーションツールとして、生徒・教員間、保護者・教員間で、三者懇談等の場面で活用されているという。また、「学校や進路のことをこれまであまり話さない子が、どのようなことを目標に立て努力しているのかを知る、よい機会になった」との保護者からの声も寄せられたとのことである。さらに、生徒の記入状況については、意欲的に自らの言葉で綴る生徒が予想以上に多いことを、研究協力校の教員が指摘している。保護者・教員間で連携しながら、シートから見えてくる生徒の意欲的な姿勢をさらに導き出し、自ら意欲的に考え自信を持って発言するような習慣として、定着していくことが期待される。これらの点から、シートの活用を工夫することによって、生徒の自己肯定感が高まる可能性が予測される。

次年度からは、シートの目標を生徒が常時携帯する「今未来手帳」の中にも記入できることになった。生徒にとってより身近な形でシートを活用できることになった。

## 3 校内研修会の支援

### (1) 校内研修の取組

これまでの取組について情報共有を図るため、以下の内容についての校内研修会を実施した。

#### ① レベルアップシートの取組

・目的と活用について

#### ② 教科(学科)の取組 (図14)

- ・森林科学科：実習を通しての学びについて
- ・環境土木科：資格取得における学びについて

#### ③ センターから

- ・6月実施の生徒の実態調査の結果について
- ・生徒の動機付けの方法について

### (2) 成果と課題

自己肯定感を育むことに向けた取組の柱であるレベルアップシートについて、その目的、活用方法などが再度確認された。また、カリキュラム・マネジメントの視点から、教科間の情報共有を目的として、2つの学科の取組を発表いただいた。

実施後の教員へのアンケートでは、

- 職員の横のつながりが大切だと再確認できた。
- 他の科での取組を知ることができ、今後の指導に生かすことができそうだ。
- レベルアップシートを積極的に活用し、クラス

の生徒を指導していきたいと思った。

○動機付けの内容は、生徒にも話したいと思いました。

などの感想の他、教科指導の在り方や生徒指導について熱い思いが寄せられた。生徒に身に付けさせたい資質・能力や授業での指導内容・指導方法など様々な点で、教員が相互理解を図り、共通の認識をもって学校づくりを考えていくことが大切だと改めて感じた。時間の確保も含めて、校内研修について、本センターの支援の在り方について、学校と協力しながら検討していく必要があると感じた。

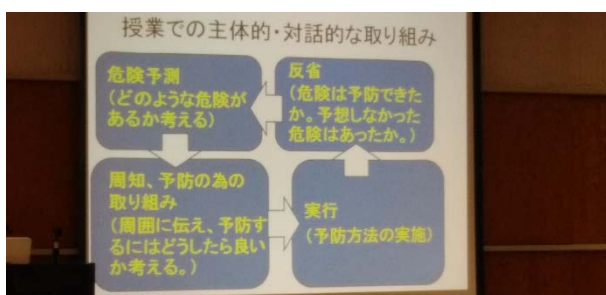


図14 発表スライドの一部

#### 4 生徒の実態調査

第1回：6月19日実施
1年生150名，2年生137名
第2回：12月19日実施
1年生144名，2年生133名
5項目 全32問（補助資料3）

なお、文・図中で「1年7月」とあるのは、現2年生の昨年のデータ（150名回答）である。

##### （1）学校生活で取り組みたいこと

現2年生の「授業」と「資格・検定」に関する取組を経年比較した（図15、16）。両項目とも「現在頑張っている」「今後頑張りたい」で特徴が顕著なものである。「授業」は1年生の7月が最も高く（82.4%、122人）、2年生になると下降気味であるが、「今後頑張りたい」と過半数が授業に対する意欲を示している。今後も、生徒の意欲を実行に移せるような授業づくりをしていく必要がある。

「資格・検定への取組」に関しては、「現在頑張っている」が25%前後と横ばい状態であるが、実際のところ、50%以上が「今後頑張りたい」としており、今後も増加する傾向にあると考えられる。進路実現の一助として生徒個人に合った資格・検定を紹介するとともに、課外・補習活動であるレベルアップタイムなどを活用して、合格に向けて

の指導を行うことが求められる。次項でも「あきらめず最後まで取り組む」生徒が43.0%、「今後もやりたい」も47.7%いるので、生徒に粘り強い取組をさせて成功体験に導くことが、自信につながるのではないかと考えられる。

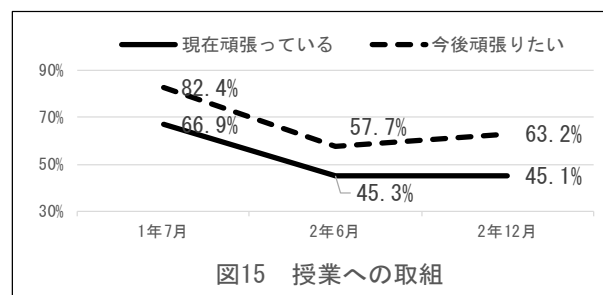


図15 授業への取組

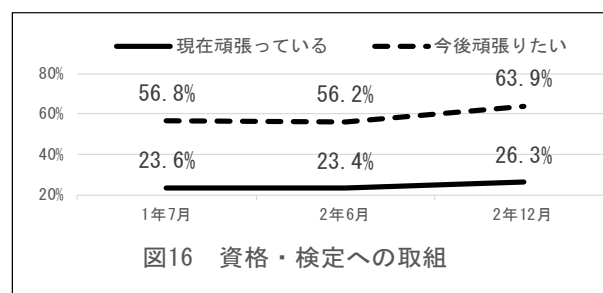


図16 資格・検定への取組

##### （2）現在していること・今後やりたいこと

12月現在で「現在していること・今後やりたいこと」で特徴があるものを図17にまとめた。

「今後やりたいこと」は「長所を伸ばす」「短所を直す」が上位を占めている。現在でも「短所を直す」ことは実行しているが、「長所を伸ばす」は15%程低い。親に限らず信頼できる大人が、本人の良いところ、成果をきちんと評価し、伝えることで、長所を伸ばし成長につながると考えられる。

「課題を見つけて解決する」は、「現在していること」の2倍近く「今後やりたいこと」としている。特に2年生は、「現在している」17.3%から、「今後やりたい」37.1%と大幅な伸びを示している。日々の授業・学習の積み重ねによって、課題発見力も身に付くと思われる。課題を見つける視点を与えられるような、丁寧な授業づくりを重ねれば、生徒自身が課題を発見できるようになる。ゆくゆくは課題解決力を醸成できるように、探究活動等を適宜、設定することが望まれる。

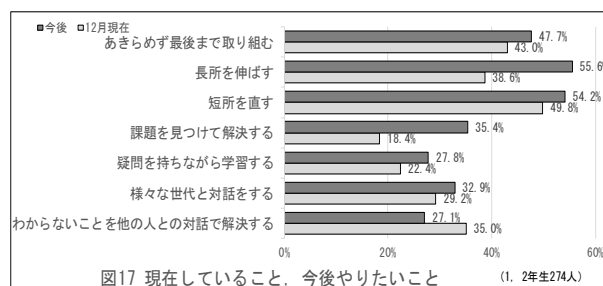
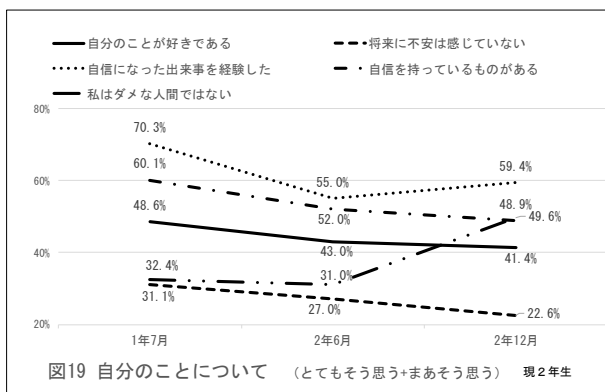
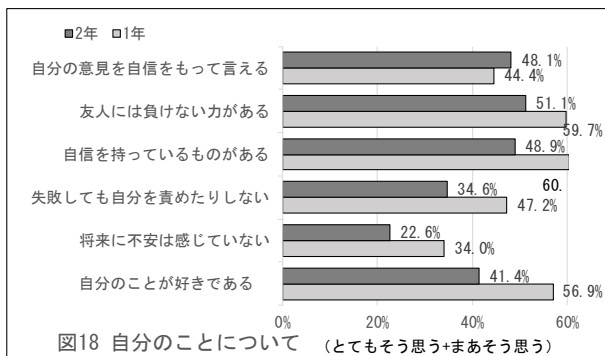


図17 現在していること、今後やりたいこと（1. 2年生274人）



### (3) 自分自身について

「自分のことについて」は12月現在の1, 2年生を比較した(図18)。総じて、2年生よりも1年生の方が高い。現2年生に関しては1年生の時は同様の結果であったが(図19), 学年が進むにつれて右肩下がり傾向にある。高校でも「自信につながる経験」を重ねて、認められることにより、「自分はダメではない」と認知させ、自己肯定感も高めさせたい。図18より、2年生は「自分の意見を自信をもって言える」傾向があるので、授業だけでなく様々な教育活動の中で、自分の意見をまとめ、発言し、認め合えるような場面を設定していくことが望まれる。



## IV 研究のまとめ

本センターが新たに取り組んだ2年間の実践研究が終了した。本センターが知のシンクタンクとして、研修以外でどのように学校を支援できるのか、どのように学校を支援すべきなのか、本センターの特性や利点を生かした支援とはどのようなものなのかなど、模索しながらの2年間であった。

### (1) 支援の在り方について

今回の研究では、授業づくり・学校づくりという視点で、

- ①授業改善への継続的支援
- ②レベルアップシートの活用に対する支援
- ③校内研修会の支援

### ④生徒の実態調査

について研究を行った。

授業改善については、研究初年度の生徒実態調査から、生徒の表面的な言動からはあまり見られなかった「生徒の学びに対する意識の高さ」を知り、学びの在り方を変えていかなければならないことを認識できたことは非常に大きな成果であった。1年目は2つの教科、2年目は5つの教科において、センター指導主事がそれぞれ1つの教科を支援した。授業改善について研究協力校と相談をしながら、その内容・方法について決定し、実践できたことは、本センターの支援の在り方の一つであるとともに、今後の校内の教科内での授業検討の在り方に対して一つの方向性が得られたのではないかと考える。

今年度、導入したレベルアップシートは、これまで研究協力校で抱えていた「生徒の自己肯定感や主体性に関する課題」の解決に向けた実践である。様式や方法が確定したのは研究2年目の1学期の途中であったが、教員も生徒もその良さを実感しており、今後も研究協力校の大きな取組の1つとなるだろう。現在の1年生は、このシートを3年間取り組む予定であるが、どのような成果が得られるか校内で検証されることを期待したい。

校内研修会においては、2年間で実施ができた回数は僅かであり、支援について課題の残る結果となった。教科の取組を共有するため、職員会議後の時間が利用できないかと模索したが、学校行事や部活動の大会などの準備もあり、時間を確保し、定期的実施することの難しさを実感した。学校全体での行事や会議の持ち方などを踏まえてどのように支援できるかを考える必要がある。

生徒の実態を把握するには、普段から生徒に直接に接する必要があることは言うまでもない。しかし、生徒が自己の内面を表面に出すことが少なくなっていると考えられる現状では、アンケート方式による実態把握は意味のあるものであることを改めて感じた。特に本研究のように、本センターのような外部の視点が入ることで、学校内では普段なかなか気づきにくい部分を捉えられる場合もあるだろう。

以上のような取組において、いわゆるPDCAのサイクルの確立には至らなかったことは大きな課題である。研究が終了した後においても、学校がPDCAサイクルを継続できるようなシステム

作りが最大の支援となる。

## (2) 授業改善と自己肯定感について

高等学校において、自己肯定感を育むには生徒の進路実現は欠かすことはできない、と言われることがある。確かに高校生にとって、自己の希望する進路実現がなされることは大きなことであるが、そこに至るまでの一つひとつの授業や学校行事、部活動などの課外活動をいかに充実したものにするかが大切となる。本研究では、授業改善を支援してきたが、生徒のアンケート結果からは、授業において生徒が自信につながると感じている活動の多くは、授業改善が不可欠であることが見て取れた。学校として身に付けさせたい資質・能力を各教科でどのように身に付けさせるかなどのカリキュラム・マネジメントとその評価が実施できると生徒の自己肯定感の醸成にさらに大きな効果が期待できるのではないかと考える。

## (3) おわりに

2年間の研究協力校を通しての研究は、これで終了となる。知のシンクタンクとして本センターが社会情勢、教育の状況を的確に捉え、それぞれの学校に適した支援の在り方を模索することが大切だと感じた。

研究協力校に限らず、新学習指導要領の実施、カリキュラム・マネジメントの確立など、教育課題は山積している。それらの課題解決を含めた学校づくりは管理職や一部の教員だけで行うものではなく、研修会などを活用して、教員全員で共有・解決することが必要となってきた。働き方改革による多忙化改善の推進も喫緊の課題ではあるが、学校の諸課題は重い荷を少数の教員で背負うのではなく、全教員が協力して背負うことで負担は軽くなるのではないだろうか。2年間の研究を起点として、今後もセンター研究として学校支援に取り組む所存である。

## 【参考文献・資料】

- ・山梨県立農林高等学校 (2018) 「主体的・対話的で深い学び (アクティブラーニングの視点) の推進 - 授業との有機的な関連を図った家庭学習の推進 -」
- ・山梨県教育委員会高校教育課「平成31年度学力向上のための取組の推進について」

- ・平成31年度山梨県総合教育センター研究紀要「主体的・対話的で深い学びの推進」  
- 生徒の自己肯定感を育む授業づくりを目指して -
- ・堀 哲夫・辻本昭彦(2019)「子どもと教師の成長を結ぶ教育評価研修会 -OPPシートによる学習・指導と評価の一体化-」

## 【研究協力校】

山梨県立農林高等学校 校長 深澤 眞悟

## 【山梨大学連携教育研究会アドバイザー】

山梨大学 客員教授 小川 巖

山梨大学 客員教授 奥田 正治

## 【総合教育センター 研究アドバイザー】

次 長 古郡 文春  
業務推進主任 篠原 茂樹